

理学博士小林貞一の「佐川造山輪廻とその日本群島の起源に對

する意義」に對する授賞審査要旨

小林君は、大正十四年以降日本群島の大地質構造についての研究に心を委ね、地質構造史を綴る意図があり、今日までこれに關する数多の單獨著作及びその門下との共著を發表し、本邦地質學に一大貢獻をなしつつある。その雄大なる構想の根幹は、昭和十六年東京帝國大學紀要第二類第五冊第七篇に公にせられたる

The Sakawa Orogenic Cycle and Its Bearing on the Origin of the Japanese Islands.

に明らかである。

著者のこの研究は、故小沢儀明博士の西南日本内帯の秋吉・於福西石灰岩台地の横臥構造及び大賀衝上横移岩塊の發見にその端を發し、先ず同外帯の四国佐川盆地の古生層及び中生層の複雑なる構造に着目し、この地に大衝上構造の存在を確認するに至り、その地殼運動の詳細及び地質時代を知るに努めた。その後、次第にその調査区域を四国各地に拡め、ここに三疊紀の中・後期に頂点に達した「秋吉造山運動」よりも若く、侏羅紀末期から白堊紀初期にかけて行われた「佐川造山運動」なるものを唱導するに至つた。

これ等両造山運動は突如として起つた一回の地殼運動ではなく、前後數回に亘つて引き続き起つた運動の總和であることを明らかにし、著者はこれ等の運動の細別を試みた。「佐川運動」に大賀・大蔭・佐川の三時階を區別したごと

きはその例である。而してこれ等の地殻運動の行われたる地帯は「秋吉造山帯」及び「佐川造山帯」と呼ばれている。

「秋吉造山運動」は、先秋吉層群（即ち秩父地向斜に於ける厚い堆積）の生じた海域に起つたものであり、この地向斜は、著者の研究せる朝鮮の平南・沃川兩地向斜とは、火成活動を伴う点において異なる特性を具えている。尙、この地向斜内堆積物には場所による差異があり、これによつて、石灰岩を主とする秋吉相、粘板岩を主とする山口相等が区別される。著者は、この異層堆積の造山帯内の分布と、地層皺曲・岩石変成とを併せ考えて秋吉造山帯における造山運動の状況の詳細を知るための一つの有力なる方便を得た。これも著者の優れた着眼と称すべきである。

斯くて秋吉台の石灰岩層については、著者は小沢博士と異なる解釈を下し、これが南よりせる横臥向斜の下翼ではなくて、元來堆積場所を異にした秋吉相石灰岩が山口粘板岩の上に横移したものであると考えた。

上部三疊紀層には美弥・皿貝・河内ヶ谷・斗賀野相が区別され、一方これ等異相堆積物の分布から秋吉造山帯における上部三疊紀の古地理を知るを得、他方、外帯においては「佐川造山帯」における大衝上構造を明らかにするを得た。

著しい造山運動には必ずいわゆる動力変成・火成活動・並びにこれに伴う変成が行われるのを常とする。著者は「秋吉造山帯」における飛彈片麻岩帯及び「佐川造山帯」における三波川及び御荷鉾の変成岩帯は、何れも先秋吉層群に属する岩石の変成したものであり、これ等はそれぞれの造山帯の中軸を占めるものであるとした。

尙、「佐川造山運動」を詳悉するために費された著者及びその共同研究者の四国及び中国地方等における中生層の詳細なる層位学上及び古生物学上の研究も重要であり、古氣候を明らかにした功勞も見逃すことができない。

この研究はその後ますます展開せられ、飛騨山地・関東山地・北上山地の地史及び構造の解釈にも関連を持つに至つた。

以上の研究は、本邦地史学上において、今日までに公にせられたる業績中特に顯著なものである。